令和6年8月15日

東洋大学キャンパス内

北区史を考える会

Association of Study on History of Kita-City in Tokyo

会　報
第152号

発行　北区史を考える会

第四八一回　月例見学会　6月11日（火）

東書文庫見学

報告　山田　美登里

初夏というには、かなり厳しい暑さの中、13時30分・現地集合の為、都電荒川線〈栄町〉で下車し初めての街を目的地を探しながら歩いていました。通りがかりの女性に伺ったところあまり詳しくはなさそうでしたが、大まかなところを教えて下さいました。別れ際にお礼を申し上げると「暑いので気をつけて…」と優しい言葉が返って来たのにはホッとするやら、嬉しくなりました。程なく歩いて行くと「北区指定有形文化財（建造物）」に認定されているという「東書文庫」に辿り着きました。落ち着いた感じの佇まいで門をくぐると前庭の木々の緑の間を昼下がりの暑さの中、かすかな風が吹き抜け、一瞬の涼を感じましたが外気は暑いので早く到着した私は担当の方のはからいで建物内の涼しい所で待たせて頂くことにしました。

案内の時刻になり、参加者6名は経産省の「近代化産業遺産」にも認定されているという〈東書文庫〉の歩みについてビデオでの解説を受け、その後、展示室の説明を受けながら各自、質問をしたり興味のあるところを更に見学したりしていました。

〈東書文庫〉の正式名は「東京書籍株式会社附設教科書図書館」で所蔵品総数約16万点の内、約7万6千点が重要文化財であるとのことです。案内の際に頂いた3点のしおりの見出しに

①教科書は時代を写す鏡
②教育の過去と未来をつなぐ
③教育の歩みを見守り続ける

以上の言葉に〈東書文庫〉の営々と続く精神を垣間見た思いです。

しおりと言えば、展示品の中に黒ずんだイチョウの押し花の様な一枚があり、説明によると書籍の保存には良い影響があるとのお話に不思議に感じたり、その効能に感心したりしてしまいました。

教科書の展示からその変遷のみならず、時代背景を想像しながらの見学は意義深いものを感じました。これから時代はデジタル化が更に進むことが予想されますが、その時代の中で、教科書の存在意義と方向性に前回（5月18日（土））の〈東洋大学赤羽台キャンパス〉見学の際、講義（授業）でペーパー類は一切使用しないとの説明が頭をよぎり、いろいろと考えることとなりました。

当日は、私共の地元である都電の走る街、北区での小さな親切と意義深い博物館との出会いに感謝しつつ帰路につきました。

付記

東書文庫開館当時は文部省から寄贈を受けた教科書も入れて五千五百冊だったそうです。

現在4年に一度改定される小学校・中学校用の教科書は、他社の物は全部購入し、高校用の分は、東京書籍出版の物だけを小・中用と同様寄贈を受けているそうです。

温度は20度から22度くらい、湿度は50％から60％くらいの間で管理されている書庫は印刷工場と一緒に建築（一九三六年）された建物の書庫だけでなく他目的だった部屋も改造して使用しているので後10年くらいは大丈夫だそうです。

（馬場記）